慈濟

ものがたり

ツーチー　2021年4月　292

●扉の言葉　文・證厳法師　訳・済運　撮影・蕭耀華

心が和すれば、世は安らかになる

事の道理を理解せず、思いのままに行動すれば、
心は常軌から外れ、結果として悪業を作ってしまい、
怒りは収まらず、災いをもたらしてしまいます。
大いなる教育によって、善法が心に入り、
あらゆる思いが敬虔で、斎戒して衆生を護れば、
全てが順調に行き、世の中は平安になります。

慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
教育で「実力」を養う　善耕／訳　4

【主題報道】
大学では社会人になることを学び、
高学力を身につける　荳荳／訳　8
「大学という道」に進む前に　荳荳／訳　10
日系企業管理職の多元的思考力と交流　慈願／訳　16
小さな町の医師 常に初心に戻る　葉美娥／訳　20
見習い看護師 自信を身につけた　惟明／訳　30

【命の贈り物】
看護師としての奉仕は私の信仰　江愛寶／訳　39

表紙

新日常
「マスクの着用、こまめな手洗い、人との距離の確保」は新型コロナウイルスに対する基本的な生活様式である。クアラルンプール慈済施療センターでは、院内感染防止のために、待合室の４人掛けのベンチを２人掛けにして、人同士の距離を１メートル以上に設定した。（撮影・何志暐）

【證嚴法師のお諭し】
刹那の同心を永遠に　慈願／訳　44

【特別報道】
コロナ禍に明け暮れた一年　荳荳／訳　50
新日常・新生活困窮者　明彤／訳　57
活気をなくした「楽園リゾート」　御山凛／訳　62
陽性者が百万人に達し、年末の団らんを直撃した　葉美娥／訳　71
困難時の悲喜こもごも　心嫈／訳　80

【国際慈善・レバノン】
ベイルート爆発事故の後　惟明／訳　88

【行脚の軌跡】
清らかな「心源」　済運／訳　100
三月の出来事　済運／訳　107

編集者の言葉

教育で「実力」を養う

◎訳・善耕

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックからすでに一年が過ぎた。世界各国で様々なワクチンが開発されて、接種も始まり、感染症が終息することを渇望している。しかしながら、新型コロナウイルスは絶えず変異し続け、世界秩序と生活様式は覆されてしまい、過去に戻ることが困難な状況にある。世の人々は速度をあげて未来世界に対応しなければならないが、教育の改革もその一つである。

今日の教育改革における重要な傾向は、「実力（competence）」を強調することである。不確定な未来に直面している今、次世代の問題解決能力と創造力の育成に力を入れる必要がある。専門性を身につけるだけでなく、それぞれの分野の枠にとらわれない見方をする必要がある。さまざまな分野の相関関係と補完性を広く理解し、融通性があるようになることである。

言い換えれば、知識を使って「何をするか」ということが大事である。どれほど多くの知識を持っていても、それが生活の役に立たないならば到底勝てないのと同じである。たとえば、将来多くの仕事が人工知能（ＡＩ）に取って代わられると予測する人がいる。しかし、ＡＩは智慧で判断して問題を解決することはできない。人と機械の最大の違いは、人には独創性と反省能力が有るという点だ。

この他、学びたいという意欲を維持して成長を続け、個人の潜在能力を伸ばしてこそ、世情の変化により淘汰されずに済む。インターネットが発達し、現代人は世界のさまざまな情報にも簡単に触れることができるが、時代の趨勢の中で自分のスタイルを見失いやすいと言える。自己、他者、そして世界

と共存していくためには日進月歩、「実力」を養う必要がある。

政府が支出する教育経費は年々増加しているが、大学生の休学や退学人数は数万人に達しており、その約四割が「志望に合わない」という理由を挙げている。学習塾業界のビジネスチャンスが止まることを知らないのは、保護者や学生の焦りを反映している。学歴社会というトレンドの中で、学歴と職業を切り離す試みは益々難しくなっている。

今月号の主題報道に、玉里慈済病院副院長の林志晏（リン・ジーイエン）医師の物語が載っている。彼は慈済大学医学部を卒業した後、偏境で医療を実践し、整形外科医になったが、その志は多くの人の価値感とは一致しなかった。彼は自分が医学部に進学した時の初心を思い出した。それは、患者の苦しみを取り除き、どの科の患者も平等に扱うことであり、たとえ患者の病状が彼の専門分野を超えていても、多方面から探求して解決しなければならないと考えた。

慈済科技大学を卒業した戴瑞瑩（ダイ・ルイイン）さんは、重病の父親を介護したことをきっかけに看護師を志した。彼女は学校の農業バイオ医療チームに同行して部落での訪問調査や部落民に農作物の販売促進を指導した経験から、農民の苦労を理解すると共に、将来、看護師になってからのより大きなビジョンも見出した。つまり、偏境に医療資源をもたらす手伝いをしたいと思ったのである。

初心は彼らが堅持し続け、困難を乗り越える原動力である。都市と農村の格差は大きいものの、彼らは名利に執着せず、日頃から「実力」を養った。そこには、知識を良い目的に使いたいという情熱、利他的な思いやり、そして自身で人生の道を切り拓く理念がある。それは新世代の学生が学ぶに値するものである。（慈済月刊六五一期より）

主題報道

大学では社会人になることを学び、「高学力」を身につける

大卒という学歴が一般化し、
今では卒業したら
就職できるという保障はない。
必死の思いでいわゆる名門校を
目指すことも良いが、
自分の能力や趣味にあった「第一志望」に進んで
基礎から学ぶ道もある。
職場に活かせる「高学力」を身につけること、
それは更に生涯を通して
役立つものとなるからだ。

（挿絵・葉晉宏　訳・荳荳）

「大学という道」に進む前に

文・葉子豪　訳・荳荳

台湾では旧正月を迎える前に「大学学科能力測定試験（全国共通の大学入試）」が行われ、高校三年生は大学の志望学部への申請や、五月に行われる四技二専統一入學試験（高等専門学校生のための大学入試）の準備に追われる。

台湾は教育改革から二十七年が経ち、高校と大学の増設政策もあり、大学の合格率は一九九四年の四十四％から今では百％になった。若者にとって学士以上の学歴は既に基本条件となっている。

だが大学に進学しても、順調に行かない人は少なくない。教育部（文部科学省に相当）の統計によると、二〇一八年度で全国九十六万人余りの大学生（四技二専を含む）のうち、六万六千人余りが退学した。その四割近くは、望んでいた内容とは異なっていたことと成績不合格が理由だった。また、休学が終わっても復学申請をしなかった休学者が約五割を占めた。前期と後期に休学した延べ人数は、それぞれ五万六千人を上回った。

この何万人もの休学者や退学者の数は、大学に進もうとしている高校生によく考えてみるよう促している。自分の性格やしたいことが何なのか。また、今持っている基礎能力は選択した学部に対応できるのか。

これらの重要な問いに対して正しい答えはない。せっかくの高得点を無駄にしないために人気学部に進み、入学してから自分には合わないことに気づく人もいる。ある人は高校の成績は普通だったが、興味のある分野の学部に入った後、一気に伸びたそうだ。教育資源が普及した今、自分に適した方向を見つけ、大学で「高学力」を身につけるという考え方が、入試で高得点を取って名門校に入るよりも重要になっている。

台南慈済中学の姚智化（ヤオ・ジーホア）校長はこう指摘している。今、大卒の肩書きは既に就職の基本条件となっており、卒業後に自分の理想としている仕事に就くことは容易なことではない。これからの進学基準は、いかに自分が興味を持ち、且つ能力を発揮できる学部に行

き、より良い専門知識と品格及び多様な才能を身につけるかだと言える。

中学校の校長が大学選びを教える

姚校長は、中学の段階から自分で模索し始め、高校では基礎学科をしっかり学ぶことを勧めている。そして、大学は社会に入るための基礎訓練の場であり、実力を高め、思慮深くなるように大学でしっかり学び、専門知識を増やして、視野を広げることが大切だ。

学部を選ぶ時、能力と興味の両方に合えばそれが一番良い。以前、大学の合格率は二〇～三〇％程度で、大学に進学した人は全般的によく勉強し、十分な能力を持っていた。しかし、現在は合格率が百％になり、中には高校を卒業していなくても大学に合格する人もいる。それで、国立大学を含む多くの大学では、新入生に「補習授業」をして、基礎学力を向上させている。

かつて大学統一入試が「一回の試験で人生が決まる」のはおかしいと批判されたため、今のように多元的な入試制度になった、と姚校長は言う。二〇二二年以降の進学学力試験は「素養を基準にした」試験にするとのことである。殆どの保護者や生徒、教育現場の教師でさえ、その重点を把握するのが難しいと感じている。言うなれば、しっかりした基礎知識を身につけ、より多く問題解決の練習をして、普段から問題に立ち向かう自信と態度を養うことが必要であるが、それは短期間で学ぶことはできない。

将来に向けて、学生は先ず基礎科目をしっかり勉強してこそ、大学の勉強をする能力ができるのである。同時に、興味のある学部或いは学部の学習内容に注目して、自分の興味や能力に適しているかどうかを確認した方がいい。やみくもに「第一志望」だけに向かって突き進まない方がいい。さもないと、大学に合格しても、勉強が苦痛になり、卒業できないことさえありうる。

一部の学部の定員は、就職市場のニーズに釣り合っていないのが現状で、将来について早めに考える必要があり、多様な能力と興味を培う必要がある。現在の用語にすると、「スラッシュ（英文の記号で「且つ」を意味する）」である。本来の学部以外に他の分野を勉強し、二つ目

の専門知識を身につけることも悪くない選択である。

大学の選択に関しては、学校の理念、態度、評価に注意を払うべきである。入学手続き者数に加えて、職場での卒業生のパフォーマンスと評価は、大学で学生がどのような特質を身につけたかを意味しており、それも参考にすることができる。

姚校長はまた、大学の新入生をこう励ました。たとえ選んだ学部が期待通りでなくても、大学は人生で最終学歴ではないので、この四年間を自分が目指す方向への準備期間として活用し、将来、就職するか大学院で勉強する時、人に遅れを取らないようにすることが大切である。学習する習慣を維持し、善意と情熱で自分の人生に向き合って欲しい。

人生を成功に導く「高学力」

台湾全土にある百五十余りの大学の中でも、慈済大学と慈済科技大学は「後山（中央山脈以東）」の花蓮にある数少ない大学で、当初は人文素養と医療人材を培うために設立された。両校とも何回か制度を変えながら昇格し、医療と人文社会領域にまたがる大学に発展した。

慈済大学と慈済科技大学の学生には、教師のサポートに加え、慈誠パパ、懿德ママが付き添っているほか、在学期間中に殆どの学生がボランティアを経験していて社会参加の頻度が高いため、感謝と努力、社会的弱者に対する思いやりという特質が身についている。

慈済大学の統計によると、慈大を卒業して内科、外科、産婦人科、小児科、救急外来などの重要な診療科に勤務している医療スタッフの四十五%が、積極的に東部や離島での奉仕に参加している。慈科大も創校三十数年来、数多くの看護師を育成してきたが、現在は農業や生体医学、健康促進及びセールスなどの分野でも、より多様な人材を育成している。両校の大学の優秀な学生の探究心と就職履歴、そして教師のサポートや意見は、大学を目指す高校生の模範と参考になるはずである。

時代は急速に変化しており、大学で学んだことが必ずしも職場に繋がっているとは限らない。「高学力」を身につけることだけが、「高学歴でも職がない状態」から逃れる道なのである。大学の四年間という時間は限られており、学習の機会は逃すと戻らない。学校を出て社会に入る前に、より良い生活基盤を築くために、大学で「大人」になることを学ぶ必要がある。（慈済月刊六五一期より）

日系企業管理職の多元的思考力と交流

口述&写真提供・荘媛棋　編集・葉子豪　訳・慈願

中国語と日本語という二つのスキルと日本での生活経験から、就職するための基礎が固まった。文化に違いがあることを知っていた彼女は、独断的な行動を避け、広く様々な意見を受け入れるようにした。

私は日本の文化にとても興味があり、中学の時から日本語を独学で学び、高校の時には日本文化研究サークルの部長になって、日本の最新の流行を研究した。慈済大学の東方言語学部日本語学科に入った時、中国語と日本語の両方ともが学科の必修科目だったが、日本語の授業が他の大学よりも進度がやや遅れていたので、私は少し困惑した。

今になって考えると、中国語と日本語の二科目を履修したのは正解だった。日本の言葉と文化を学んだほか、中国語の精髄を日本語に取り入れることができるからだ。特に今は日系企業に勤めているため、中国語と日本語を分かりやすく表現豊かな文章にしなければならないことが多々ある。そういう時、慈済の人文教育には日本の伝統思想

荘媛棋（ソウ・エンキ）さんは、大学時代に中国語と日本語の二学科を履修したことと、国際交換留学生の経験を職場で活かしている。

と似通った部分が多いので、役に立った。

大学三年生の時、学校の国際交換留学生に選ばれ、学校を代表して京都佛教大学に就学した。初めは自分の日本語力が足りないのではないかと心配したが、毎日強制的に聞き、話し、読んだことで、二、三カ月後には大分慣れ、日本語で思考する習慣が身に付き始めた。それに加えて、世界各国からの留学生と交流した。一年間のこのような留学体験により、その後の就職活動では日本語の会話の面で力を発揮することができた。文化の違いに気がつくので、物事に対して多元的な思考ができるようになり、独断専行せず、周りの人の意見をよく聞いて、それを統合してから判断するようになった。

日本語というスキルと日本での生活体験は、職場での基礎固めに役立った。日系食品会社の台湾支社で総務のアシスタントを務めていた当初、本社の社長が台湾に来た時には、通訳アテンドを担当した。元々、色彩や化粧品産業に興味があったので、そのあと日系の化粧品会社でマーケティングに従事し、半年後には化粧品の宣伝と広報次長になった。メディアとの共同作業や広告の文章を書く以外に、日本語の雑誌に載っている化粧品に関する文章を翻訳した。ブランドの知名度アップを図りながら、常に流行の趨勢を掴むことが大切だった。

新社会人にとって、最も重要なのは「洞察力」と「思考力」だと思う。仕事上で遭遇する困難は、大半が学校や本で学ぶことはできず、いつも失敗から学ぶしかない。最も大事なのは洞察力と思考力で自分を強くすることだ。失敗を恐れず、勇敢に学習する態度を身に付ければ、仕事は益々、順調にいくものである。

「人生諦めが肝心」と言うが、逆境に遭ったからといって投げ出せばいいわけではない。人生に一本の道しかないと思い詰めずに、今の環境が思い通りのものでなくても、そこで観察し、思考して再選択すればいい。道は歩けば歩くほど広くなるものである。

（慈済月刊六五一期より）

【職場にもって行く高学力】

≪「洞察力」と「思考力」を使って自分を強くすれば、失敗を恐れないばかりか、失敗することで学ぶことができる。

≪適時に放棄するのも大事な事。なぜなら人生の道は一本しかないのではないから。

小さな町の医師　常に初心に戻る

文・葉子豪　訳・葉美娥

玉里慈済病院の林志晏（リン・ジーイエン）副院長は自分の整形外科領域を越えて、怪我、蜂や毒魚に刺された患者、火傷などの治療も行っている。地方の医師は、「如何に患者を助けるか」を考えるだけである。「慈済医学部に入った時、『苦を抜き、楽を与える』のが目標でした。自分が役に立つとしたら、相手がどの科の患者なのかは考えないものです」と彼は語った。

台湾の花蓮と台東の県境に位置する、人口が僅か二万人の玉里鎮は、医療資源に乏しい山奥に比べて、相対的に医療資源は豊富である。しかし、玉里慈済病院は内科、外科、産婦人科、小児科、漢方内科、歯科を備えているものの、病床数は三十床余りで、規模から見ればミニだと言える。歯科を除いて、全病院の外来医師の三分の一は、慈済大学の医学部あるいは学士後漢方医学部の卒業生で、整形外科の林志晏医師もその一人である。

彼が玉里に定住してから十一年が経ち、主治医から救急外来の主任を経て今は副院長である。赴任した当時は毎日休む暇もなかったことを思い出す。月・火・木は一般外来、水・金・日は救急外来の当直に入り、会議の予定には、やむをえず一般外来の時間を調節して出席した。そして、時間があれば患者の手術を行わなければならず、唯一の休みである土曜日に組み込むこともあった。

時を一九九七年に戻すと、苗栗県竹南鎮に住んでいた林さんは花蓮に来て、当時の慈済医学院に入学した。幼い時から、医師になるとは思ったこともなく、花蓮には一回しか来たことがなかったが、気がつけば東部に落ち着いて二十数年が過ぎていた。

忘れ難い遺体先生

林さんが医学部に合格した時、郷里の両親や先生、先輩たちは彼を誇りに思ったが、苗栗から花蓮に来た彼を迎えたのは、山ほどある勉強のプレッシャーだった。

「テストの前、多くのテキストは『熟読』することはおろか、一回「目を通す」こともできませんでした」。大学三年の時に解剖学の講義が始まった後、日々の勉強は更に大変になり、人体の構造や各部位を覚えなければならないだけでなく、何百何千もの難しい医学専門用語を外国語で暗記しなければならなかった。授業や自習に加えて、よく解剖教室で「居残

り」をした。

医学生から「神にしか解らない」と冗談を言われる神経解剖学は、神様でも理解できない学問に見えた。人体の神経伝達経路の殆どは肉眼では見えず、図解から推測するだけである。脳内部の神経構造も非常に細かく密集していて、コンピュータのＩＣ回路のように、どれがどれに繋がっているのかは見ただけでは見分けることができない。

当時、林さんが学んだ時の医学部では、学科の授業と見習い、実習を含めて七年かけて、ようやく卒業証書をもらうことができた。途中で挫折した人もいたが、大部分の学生は何とかそれを乗り越え、自分に適した領域に進むことができた。「手術が苦手で内科を選んだ同級生もいました。また、お宅系の人は、病理学を選んで、器官や組織のサンプリングに関する研究をしていました」と林さんは言った。彼は医学生だった間に模索し続け、最後に進路を外科に決めた。

解剖学の講義を受けた年、彼は遺体先生と遺族に深く感動した。彼の遺体先生だった劉芳菖（リウ・ファンチャン）さんは、当時の自分と同じくらいの年齢で、二十二歳の時に肝臓がんで亡くなっていた。がん末期に献体同意書にサインしていたので、両親と弟もその遺志を尊重して、若い遺体を医学生の教育のために慈済医学部に献体したのだった。

林さんは大学三年生の時、学校が催した遺体先生の起用式と追悼式に参加したほか、同じ解剖チームのクラスメートと一緒に、冬休みのランタン・フェスティバルの時に、台南市塩水区にある劉さんの実家を訪問した。劉さんの家族は、彼らを塩水ロケット花火祭りに案内してくれた。

林志晏さんは大学三年生の時、遺体先生（献体者に対する尊称）の追悼式典で劉芳菖さんの断捨離精神を語った。彼は後に、その時の感動を患者への思いやりに変えた。（写真・上：慈済大学、下：玉里慈済病院）

「劉さんのお母さんは、私たちを自分の子供のように見てくれ、私たちも『おばさん』と呼んでいました。劉さんは私たちと一、二歳違うだけですから、自分の子供の献体については、親として心の中では大変辛かっただろうと思います」。その忍びない心の葛藤を、林さんは医療行為をする時、よく思い出す。

志と興味に一致した仕事

林さんは卒業後、整形外科を選んだ。初期臨床研修医であっても専修医になっても、常時「睡眠も休暇も取れない」多忙をきわめても、彼は一言も文句を言わなかった。臨床勤務の合間を利用してもっと勉強する計画を止め、自分の志と興味に合わせ、そして患者から頼りにされたこともあり、台湾の東部に残って医療を続けることにした。

農業が主体の玉里鎮では、多くの住民が農耕で怪我をしたり、よく転んで手足を骨折したりする等の事故が発生した。人口の高齢化と共に関節老化の問題も非常に多いため、この町には整形外科医師が必要なのである。

田舎の病院では一つの科を一人の医師で支える場合が多く、「その医師がいなければ、その科は存在しません。そして、いないからと言って、別の医師に診てもらうこともできず、遠くまで行って医師を探さなければならないのです」と林さんは、その町に残った理由を簡単に説明した。

玉里に来てから数年の間、救急外来に勤務していた時には、あらゆる種類の外科の患者を殆ど一手に引き受けていた。一般の外傷や骨折から蜂や毒魚に刺された患者、火傷して皮膚の移植を必要とした患者まで、丁寧に処置しなければならなかった。「整形外科の訓練を終えた後で火傷の患者まで受け持つとは思いも寄りませんでした」と林さんは笑いながら言った。彼の専門領域は整形外科から救急外来にまで広がっただけでなく、一般外科と形成外科にまで及んでいる。

「私の初心は整形外科の患者を治療することだけではなかったからです」。それなら初心は何だったのか？「私たちが十八や十九歳だった頃、医学部を選んだ理由は、患者の『苦を抜き、楽を与える』ことだったはずです。もし役に立とうと思うのなら、患者を診療科別に分けるわけにはいかないでしょう」と林さんが言った。

変化球はいつでも飛んでくる。あらゆる状況や傷口を処置できるとは限らない

が、医師として他に責任を転嫁するのではなく、努力して患者を助ける方法を見つけるべきだ、と林さんは強調した。「ある人に、整形外科医なのに、救急外来に来て、困難や適応できないことはないのですか、と聞かれました。私はいつもこう答えています。例えば、交通事故で骨折した人は何科の医者に診てもらいますか。整形外科でしょう。今、救急車で運ばれてきた患者を、骨折していないからといって私が診なくてもいいのでしょうか。私たちの一般外来にはもっと重い症状の患者もいます」と彼が言った。

先輩の模範を忘れず、医業に励む

林志晏さんは、慈済医学教育が重んじている医学人文を振り返り、「言葉での教育よりも身を以て教える教育の方が大事なのです。まだ、初期臨床研修医だった頃、先生たちは皆そうしていました」と言った。医学人文と言えるものが、慈済大学の「無言の良師（献体者の尊称）」の解剖授業に含む人文的な振る舞いから、全ての臨床医が患者にあなたを尊重し関心を寄せていると自然と感じ取ってもらえるように至るまで、一つ一つ林さんの目の前で繰り広げられたのだった。

病院の管理職という重責を担い、林さんが財務諸表を見ていた時、多くの患者が入院して治療も順調であっても、病院がいつも赤字であることに気がついた。ましてや、治療過程が複雑で、手術を繰り返したり入院日数が増えたりした場合、あるいは家族のいない患者が退院を迎えて治療費が支払えない場合は尚更、病院の経営を圧迫する。「それでも私たちは、患者を入院させ、きちんと治療します。患者にお金がないからとか、社会的弱者だからという理由で、医者が回診を疎かにすることはありません。逆に彼らの病状は複雑なので、より多くの時間をかけて世話します」。

林さんは更にこう語った。「そのような患者はもしかしたら別の病院で拒否され、遠いところからここまで来たのかも

【職場にもって行く高学力】

≫ 自分の職業を選択した初心を思い起こせば、難題を解決することができる。

≫ 全ての職業が待遇も良くて仕事量も少なく、家から近いことはあり得ない。しかし、取るものと切り捨てるものを選択し、手伝ってくれた人に感謝することはできる。

しれません」。「たとえ赤字になっても、その患者を断ってはいけません。医師としての初心は金儲けではなく、患者の治療なのですから」。

家族全員で引っ越す

林さんが最初に玉里に赴任することを打ち明けた時、家族にはかなり反対された。両親にとっては花蓮でも十分遠いと感じられたのが、今度は玉里である。いつ苗栗に帰って来るのかと思ったのだ。妻は、玉里は山奥で不便なところなのではないか、子供の将来の就学はどうなるのかと心配した。そこで両親は一歩譲って、「それなら三、四年だけにしたらどうか？」と聞いた。

「正直言うと、家族の支えがなければ、医師は一人では頑張れません」。林さんは、家事一切を担い、彼が仕事で余計なことを考えなくても済むようにしてくれている妻に感謝している。両親も息子の苦労を理解しており、時々、旅行を兼ねて玉里へ孫に会いに来る。一家が和気藹々としていることに、林さんはこの上ない喜びを感じている。

「家族が仲良く一緒に暮らすことは、何よりも重要な事です」と林さんが笑顔で言った。「仕事の全てが待遇も良くて仕事量も少なく家から近いなどありえませんから、ここに引っ越して来るのも一つの選択肢でした」。

小さい町は人情味に溢れていて、医療人員がこんな地方に来て働くのは容易なことではないと、みんなが分かっているので、彼らの奉仕を格別に大切にし、感謝している。林さんが家族連れで町を歩いていると、いつも住民は陽気に彼に挨拶してくれるし、外来の診療では患者が「先生、暫くショッピングセンターに行ってないでしょう」と冗談を言って、林さんを笑わせることもある。

「額入りの感謝状ではありませんが、文旦をくれる人がいます」と林さんがユーモラスに言った。

「人生が楽しいのは、所有物がたくさんあるからではなく、不満が少ないからです」と彼は自分の心境を静思語で表した。気骨のある整形外科医師である林志晏さんは、「当初、都市から田舎に来たことさえ不満に思わなかったのですから、他に何も気にすることはありませんよ」と言った。愛で玉里を照らし続ければいいのだ。（資料提供・慈済医療人文月刊誌の「人醫心傳」）

（慈済月刊六五一期より）

見習い看護師 自信を身につけた

文・葉子豪　写真提供・戴瑞瑩　訳・惟明

重病の父親の看病を通して、戴瑞瑩さんは患者とその家族の気持ちをより理解するようになった。また、大学の先生に付いて部落の住民に農産物の生産販売を指導したことで、彼女は農業の苦労を知った。看護師のキャリアを始める前から、彼女の進路ははっきりしていた。それは、いつの日か片田舎に医療を根付かせることであった。

慈済科技大学看護学部に在籍していた戴瑞瑩（ダイ・ルイイン）さんにとって、就学が苦しくて悲しい旅路であったのは疑う余地はなかったが、それは早くにして彼女の人生の方向を固めることにつながった。

戴さんが三歳の時、両親は離婚し、母親が家を出た。父親は力仕事をして一家の生計を立てた。思いも寄らず、父親はリストラされた後で股関節を負傷した。両側とも人工股関節に交換したため、重い物を持つことができなくなり、二度と力仕事で収入を得ることができなくなった。祖母が脳卒中で倒れた後、親戚はお金を出しあって、父親に祖母の「看護」をしてもらうことにした。叔母は時折彼らの家計の足しになるようにと、父親が裏庭に栽培していた野菜を収穫して売ってくれた。「小さい頃いつも、私が何か悪いことしたから母が私を残して家を出たのではないか、と思っていました」。父親が悲しがるといけないので、その思いを胸の内に秘めておくしかなかった。

戴家は「慈済」や「家扶基金会」のような慈善組織から援助を受けてきた。戴さんも中学校に入った時からアルバイトをしながら学校に通い、家計を助けてきた。高校の時は良い成績を取って奨学金をもらった。クラスメートが休日に遊びに出かけたり映画を見に行ったりしているのを見ると、苦学していた彼女は悔しいと感じたこともあった。「しかし私は涙を拭って自分に言い聞かせました。今、勉強しなければ、何も変えることはできない。頑張れば、変わるかも知れない、と」。

戴さんはひたすら学問に励み、優秀な成績で先生に認められた。しかし、思いも寄らず、大学の統一試験の直前に、父親の視力が大幅に低下して失明してしまったのだ。彼女は大きなショックを受け、受験結果は予想以上に良くなかった。

幼い時から父親のことで病院をよく出

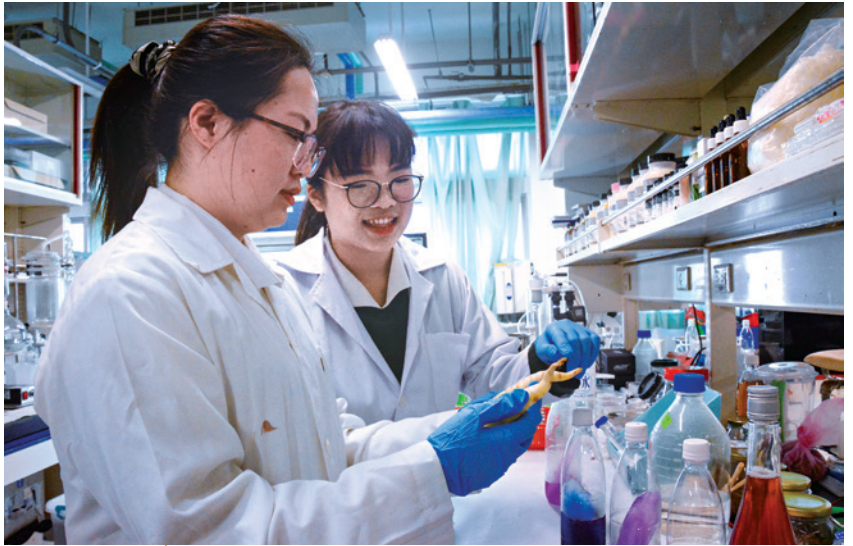
入りした関係で、彼女は患者を世話する看護師の後ろ姿を見ては憧れるようになった。父親の応援もあって、二〇一六年、彼女は慈済科技大学看護学部に進学した。

大学に入学する前、父親は彼女に十万元（約三十八万円）を渡した。何故、父がこんな大金を持っているのかと彼女は驚いた。小さい頃から大きくなるまで、彼女が渡したお金を少しずつ貯めてきたものだ、と父が言った。父は何故そのお金を使って自分の生活を楽にしなかったのだろう、と彼女は心が痛むと同時に腹が立った。父親はこう言った、「今生はお前に何もしてあげられない。あげられるのは生命の意志力だけだ。それがあれば、あらゆる難関を乗り越えることができることを信じなさい」。

看護学生が地元で地に足をつける

大学一年の必修科目である解剖学は、最もきつい学科だ、と同級生が異口同音に言っていた。また、担当の耿念慈（ゴン・ニェンツー）先生は厳しかったので「不合格者」も多く、クラスメートたちは単位が取れないことを心配した。しかし、戴さんはただ成績が良いだけではなく、彼女の人格も先生に好印象を与えた。「一般的に成績が良いと自分のことしか見えませんが、彼女はクラスメートに対してとても熱心なのです」。彼女は忙しい学業の中でも暇を見つけて、勉強が遅れていたクラスメートの面倒を見ていたのだ。耿先生は彼女に、慈科大農業バイオ実験室でアルバイトする機会を与えた。彼女は慈済やスポンサーから資金援助を受けただけでなく、異なる領域の世界を目にすることができた。

先生と一緒に農作物の研究で、標本採集の為に出かけたり、部落で農作物栽培の指導をしたりしたほか、多くのイベントの開催を手伝った。実家が宜蘭にある戴さんは、花蓮県内の奇美、佳民、織羅部落、瑞穂の有機農場だけでなく、遠く台東県の達仁村にある土坂部落にまで足を運んだことがある。



戴瑞瑩さん（右）は授業の合間を縫って、農業バイオチームの実験に参加した他、先生やクラスメートについてフィールドワークに出掛けた。（写真提供・慈済科技大学）

父親を看護した経験から、戴瑞瑩さんは看護師としての志と使命を感じた（写真左）。傑出した成績と勤務態度によって、彼女は頭角を現し、玉山ボランティア基金会の奨学金を獲得した（写真右・左の人物）

多くの部落でごく普通と思われていた農作物が、科学分析のおかげで珍しい品種だと分かった。例えば「雨来茸」と呼ばれるイシクラゲ（陸棲藍藻の一種）は通常雨上がりの後、芝生から生えてくる。この食物繊維とタンパク質が豊富でカロリーが低い植物は、先住民が部落で特別食として使って来たものである。

慈科大のバイオチームはその中からタンパク質成分を取り出した。それは保湿と修復機能を必要とする湿潤療法に使うことができ、傷口の回復や美容面で活用できる。また、彼らはイシクラゲの「無土壌栽培」の技術を開発することで、生産量を十倍上げただけでなく、本来キクラゲのような平たい形状のイシクラゲを丸い形になるよう栽培し、「タピオカ」や「ビーガン・キャビア」のような食品にしたり、その成分を抽出して他に応用したりした。その大挙によって慈科大チームは二〇一七年の「高雄ＫＩＤＥ国際発明及び設計大会」で金メダルを獲得した。

「私の研究室に残るのはそう簡単なことではありません」と耿先生が言った。学生は普通、授業のない時や週末の時間を利用してバイオチームの手伝いをしているので、農作物の処理や実験、部落に出かけてイベントを行うなど、休みはないと言える。しかし、この試練を経て、持続力が身につけば、人よりも大きな未来が待っている。メンバーの中でやっているうちに興味が湧いた者は、卒業してから慈済の慈善農耕志業に身を捧げた。看護学部を卒業してから専門を超え、大学院で生化学を専攻する人もいた。

戴さんは終始、看護師を目指すと決めていた。チームメンバーとフィールドワークに行ったり、教育部の「大学の社会責任プロジェクト」に参加して、片田舎でボランティア活動をしたりした経験から、彼女は看護の仕事にも想像を膨らませた。「私は将来、看護の仕事に部落の要望を取り入れ、もっと看護と医療を現地に根付かせ、人道的に行いたいと願うようになりました」。

人生の再出発

大学二年から三年に上がった時、家から肝臓癌末期の父親が危篤状態だという知らせが入った。戴さんは、バイオチームが数日間海外遠征するのを機に、心の痛みに堪えて休学手続きを取った。さよならさえ言わない別れ方に、耿先生自身大きく驚いただけでなく、彼女を知っている学部の先生も信じられなかった。「彼女は自分に高い目標を設定していて、クラスメートたちと一緒に卒業すると約束していたのに、休学するなんて信じられません」と看護学部の張紀萍（チャン・ジーピン）主任が言った。

父親が亡くなった直後のあの頃は、戴さんにとって人生で最も悲しい時期だったのだ。「以前、生活の重心と目標はいつも父でした。父がこの世を去った時、私は彼の後を追おうとまで思いました」。彼女と連絡を保っていた耿先生は、どれほど心配しても、お菓子を送ったり、電話で関心を寄せたりすることしかできず、たとえ電話がつながっても会話は少ないことが多かったという。「食事はちゃんと取りなさいよ」というのが、耿先生がよく口にした言葉だった。

父親の葬式を終えた後、戴さんは復学手続きをした。学校に戻ってから、先生の紹介で彼女は静思精舎でボランティアとして、尼僧たちと一緒に働いた。静思精舎の田畑や加工工場で働き、よく汗と埃まみれになった。体が労働でクタクタになることで、心は次第に静まっていった。

「師父（スーフ、出家者の呼び名）たちは、私には仏法について多くを話さないのです。話してくれても私には理解できなかったでしょう。身でもって説法し、大地や植物、人の全てに対して無私と公平の愛を捧げています。無条件で私を受け入れてくれたので、私は格別に温かさを感じました」。彼女はその時に、堅持、意志力、勇気、愛とは何かを身でもって学んだ。

重病の父親を看病した過程を経て、彼女は患者やその家族の気持ちをより理解できるようになった。また、先生に学んで研究し、農民の指導をした経験から、部落が直面している苦労と困難を理解することができた。「病院に勤めてからは、もっと多くの臨床経験を積んで、将来は片田舎に行っ

【職場にもって行く高学力】

悔しい時、私は自分にこう言い聞かせた。学生である間に勉強しなければ、何も変えることはできない。堅持すれば、変われるかも知れない、と。

貴方が意志力と勇気、愛がどういうものかを体得したなら、もっと人の気持ちを理解し、未来に対してももっと夢が持てるようになる。

て部落で奉仕するだけでなく、医療資源を整合したいと願うようになりました」。

二〇二〇年十月、彼女は優秀な成績を修め、コンテストと社会奉仕での卓越した成果によって、玉山ボランティア基金会の「看護人材育成奨学金」を獲得した。その賞は同基金と公立、私立科技大学十校及び専門学校の看護学部とが共同で設けたもので、参加者は予め学部の推薦を受け、その後、各校から推薦された優秀な学生たちの中から、厳しい書類審査と面接を経て受賞者が選出される。

「この賞を受賞したことで、私の人生はリセットされたような気がしました」と戴さんが打ち明けた。それまでは疑いと躊躇いを感じたこともあったが、諦めなかったのが幸いだった。六月に卒業した後、彼女は公費奨学生の義務を果たす為に慈済の医療機関に赴任することになり、看護師としての第一歩を踏み出すことになった。その後は片田舎での医療という目標に向けて進むことになる。

「看護の仕事はとても大変で、長続きしないと思われがちです。私もそう思うことがありましたが、看護師になったことで、私は生命の大切さを思い知ったのです。また父を看病した経験を通して、この仕事は私の志と使命だと考えています」と戴さんがきっぱりと言った。

（慈済月刊六五一期より）

命の贈り物

看護師としての奉仕は私の信仰

◎口述・田廣增（花蓮慈済病院看護師）絵・陳舜芝
編集・黄玉櫻（台中慈済ボランティア）訳・江愛寶

微笑みと温かい声音に患者さんは信頼と安心感を覚える。これが看護という仕事の魔力なのだ。私たちが患者さんを専門的知識からサポートすると、患者さんも生命の気魄で私たちに応えてくれる。今この瞬間を逃さず直ちに、周りの一人一人を愛すようにと教えてくれる。

私は花蓮加湾部落のタロコ族出身で、実家は静思精舎の隣村にあります。花蓮慈済病院に勤務して二年

になりますが、よく部族の人が診察に来るのを見かけます。特に巴伊（パイー・タロコ族語でお婆ちゃんの意味）の場合は「どこそこの子供さんじゃないかい！」と声をかけられます。部族の人は皆クリスチャンで、私たちは一緒に祈りを捧げる間柄なのです。看護師をしているとそれでなくても第一線で患者に接していますから、身体的なケアだけでなく、心を慰めることもできると感じています。

ある夜間当直の時、肝臓癌末期の患者が搬送されてきました。おじいちゃんの顔の輪郭を見て同族の人だと分かりました。私達が家族に手足を拘束したいとお願いすると、憔悴した眼差しのおばさんから「それは止めてください。おじいちゃんは拘束されるのが好きではないから」と言われました。

私は「あなたたちのためにお祈りしてもいいですか？」と言っておばさんとおじいちゃんの手を取ると、一緒に祈りました。おばさんは目頭に涙を浮かべ、祈り終えてから胸の中の全ての悲観的な感情とおじいちゃんの治療についての考え方を、私に伝えてくれました。その時私がおばさんに接したのは十分足らずでしたが、お互いに家族のような気がしました。

それからというもの私はよく病室に行っておじいちゃんを見舞いました。ある夜、おじいちゃんは息が荒くなりました。すでにＤＮＲ（ホスピス緩和医療と生命維持に関する医療行為に対する意思表示）には署名があり、臨終の時は心肺蘇生法を施さず、気管切開しないことをおじいちゃんにも家族にも確認していたので、おじいちゃんにはまず酸素を与えて呼吸を楽にしてあげました。

翌日、日勤の人と交替するとまたおばさんに会いに行きました。病室の外まで来た時、おばさんは私を見て抱き締め、むせび泣きました。私達はお互いに何も言葉を交わしませんでしたが、その時おばさんには寄りかかる肩が必要なのだと分かりました。

私はおばさんに、私たちがついているから安心して欲しいと伝えま

した。おばさんは「それでは帰ります……」と言って、一緒におじいちゃんの着替えを済ませてから退院の手続きをしました。私は、「おじいちゃん！お疲れ様でした。馴染みの場所に帰ったら、楽しく過ごしてください。神様が祝福してくれます」と言葉をかけました。最後に私は同族の言葉でおじいちゃんに「さよなら」と告げました。その時、おじいちゃんは突然目を開けて私を見ると頷いたのです。その時の様子は今でも深く印象に残っています。

私たちは患者さんにベストを尽くして専門の知識からのケアをします。患者さんは生命の気力で応えてくれます。如何なる態度で病に向き合えばいいか、如何に刹那を把握して、直ちに周りの一人一人を愛すべきかを私たちに教えてくれるのです。以前、慈済科技大学で学んでいた時、ある尼僧が「生は偶然で死は必然です。無常は往々にして明日よりも先に訪れるため、身近な人を大切にしなければいけません」と教えてくれました。

命の贈物

看護という仕事には大きな魔力があると感じています。それは微笑みと温かい声音によるものです。病室を巡回する時、患者のおじさんやおばさんたちと挨拶を交わし、「私は皆さんのお世話をする看護師です。必要な時は私たちを呼んでください」と一分間足らずの自己紹介をするだけで、患者さんは私たちを信じてくれますし、傷口をきれいに消毒してガーゼを取り替えるのも嫌がらなくなり、配った薬は効果があると信じて飲んでくれますから。これが、看護師が患者に与える信頼と安心感なのでしょう。

病院で同族の人を世話する時、同族の言葉を使い、馴染み深い顔に目を合わせ、そこに息の合ったユーモアでも加えれば、ケアもとても自然体なものになります。私にとって看護は愛と責任と信頼であり、奉仕は私たちの信仰です。看護師は性別、人種、宗教にこだわりを持ちません。私はタロコ族の男性であり、クリスチャンで、看護師です。（二〇一九年九月二十八日ボランティア朝会の内容より）（慈済月刊六四一期より）

【證厳法師のお諭し】

刹那の同心を永遠に

◎訳・慈願　絵・林淑女

仏教のため、衆生のために発心立願する人々を褒め称えても、人生がとかく行き来することに嘆きを感じます。一個人の力には限りがあり、より多くの善人を集めて大愛を広め、愛のエネルギーを結集して永劫のものにしなければなりません。

過ぎ去った一年は、新型コロナ感染症が世界を覆いました。新年が訪れても願うはただ萬物が栄える喜びに満ちた良い年であること、そして毎日が春節であるかのように、お互いに祝福しあい、平安であることを祈っております。さらに世の中が平穏無事で人々が善念を抱き続け、心は日々良い考えを持ち、口では良いことを話し、身で善行を実践することを期待しています。

今回の疫病は全世界を恐慌と不安に陥れましたが、平穏無事に過ごせたことに絶えず感謝し、更に行動を以て慎み戒め、敬虔な心を表さなければなりません。皆がマスクをつけてお互いに守っていますが、源に立ち返って、口と疫病に何の関係があるのかを考えなければいけません。

世界の人口が増加すれば、欲もまたそれにつれて増長します。欲念の扉が開かれた時、破壊をもたらす最大の源は口による欲です。世界人口七十数億人が、毎日、口に入れる生き物は二億余りに上り、一年で八百億余りの家畜を飼育しなければならず、その呼吸と排泄物で土地と水源、大気が汚染されています。

人は一食に二杯のご飯で満腹になりますが、これら家畜は何カ月または何

年も飼育する必要があり、その食用とする穀類は膨大な量に上り、人類の分まで奪っているのです。食卓に上るのは僅か数十分で、数切れの肉に過ぎませんが、人々はそれで本当に健康になれるのでしょうか？口を満足させるだけとは言え、実は細菌を呑み込み、地球環境に多大な破壊と汚染をもたらしています。益々重くなるその業力は衆生の共業となり、壊滅的な災害を引き起こしています。

疫病という災難が無くなるかどうかは人心にかかっています。菜食は人心を支える最も根本であると同時に、最も完璧な愛であり、人を愛するだけでなく、萬物の生霊をも愛さなければなりません。精一杯、戒を守って菜食するよう呼びかけ、人々がけじめを持って秩序から外れず、更に愛を広めれば、それだけ殺気は少なくなるのです。汚濁した疫病が早く終息し、マスクが要らなくなり、再び新鮮な空気に包まれることを期待しています。

生生世世に亘って進む方向が一瞬のぶれもないようにするのは、一瞬一瞬の心の持ち様にかかっている

年末の行脚で二度の歳末祝福会を執り行いました。合わせて六十日の間、現代テクノロジーに感謝しています。私の声は台湾全土だけでなく、全世界に届き、何処へ行っても慈済人は「オンラインで法師と共にあり」、私の話を聴き、私が話した法を伝承して広め、私がしたいと思う善行をしており、私はとても満足し、安心しました。そして、行脚から戻った時、自分の今世の方向が悔いのないものであることに自信を深めました。

仏陀は、衆生には皆、仏性が備わっていると言いましたが、私は、歳末祝福会で皆が法を心に入れ、同じ信念の下に「刹那の同心が永劫に成っている」のをこの目で見届けました。仏陀が大いなる因縁によって人間界に来られたのは、菩薩法を教え、さらに身でもって努め励むためでした。このような時代のこの社会に、これほど多くの人が同心を持ち、この世の平安と疫病の終息を祈願していることに、私は感謝と感動を覚えました。

これまでの歩みの中で、大愛という永遠の情を感じました。「賛嘆」は三つしかありません。誰もが生生世世、「仏教のため、衆生のため」を決して忘れず、誠意のこもった言葉が心から発せられていた故に、私もそれを心から受け取ることができました。誰もが仏性に回帰していることが、私の一つ目の賛嘆

です。

二つ目の賛嘆は、人は元より善が備わっていることです。五十銭の「竹筒歳月」に始まり、身の程知らずの私は慈善と病院建設を始めましたが、善行に対する人々の支持は泉のように湧き出て、私に自信を与えてくれました。慈善、医療、教育、人文のどれを取っても、五十年来人の役に立ち、社会に影響を及ぼして来ました。私は、志、願、力のある慈済ボランティアがその量と外見に執着せず、より多くの人を呼び寄せてこの道を切り開いて来たことに賛嘆しています。

与えた力の多さにかかわらず、私はいつも同じように感謝しています。長年、全力で支持してくれる多くの人々は、私に随行して片隅に座り、私が彼らのことに言及しなくても気にしません。嬉しいことに、そうして彼らは「三輪清浄（無我相、無人相、無物相）」の修行をしているのです。

三つ目の賛嘆は感嘆でもあります。人生は行き来しますが、それは自然の法則です。特に今回の行脚では、会いたいと思っても永遠に会うことができなくなった人がどれほど多かったことか。弟子が先に逝けば、私は心が痛みますが、師弟関係は生生世世の約束事であり、先に逝った者が必ず戻ってきて道を切り開き、法師が戻って来た時、一緒に前進するものと信じています。

皆さんが私に追随する方向は同じだと思います。発願して菩薩になるには、観世音菩薩の助けを聞いて苦を救う精神と、地蔵菩薩の広く衆生を済度する願がなければなりません。災害が増えているこの世では、一人の力はまるでトンボが水を揺らす程度のもので、なかなか行き渡ることは難しいのです。尽きるところ、より多くの善意の人を集めて大愛を広めれば、虚空に行き着き、遍く法界に届くことができるのです。

時は全てを累積して成就させるため、人とも事とも争わなくても、私は時間がとても気になるのです。時を留まらせることはできませんが、私は時を大切にしています。毎日、何日過ごしたかではなく、何秒過ごしたかと、慎重に慎重を重ねて歩んで来たこの人生は僅かな偏りもありません。生生世世の方向は秒ごとの信念によるものです。皆さんも愛のエネルギーを永劫なものにしてください。

（慈済月刊六五二期より）

コロナ禍に明け暮れた一年

新型コロナウイルス感染症は二回目の冬を迎え、世界の感染者数は増え続けており、未だ落ち着いてきていない。欧米諸国では感謝祭の休暇の後、感染が更に広まり、アジアの日本、韓国、香港の新たな一波は以前よりもひどくなった。人々はこの、世紀のウイルスに対処した新しい生活様式を作り出しているが、それでも彼らはできるだけ早く異常から通常に戻ることを願っている。

訳・荳荳

●アフリカ南部に位置するジンバブエは感染予防物資が不足しており、マスウィンゴ県のムレレクワ小学校の子供たちはマスクの代わりに様々な布を使って、鼻と口を覆っていた。慈済ボランティアは11月下旬に千個の医療用マスクと赤外線型額体温計を学校に寄付した。（撮影・Hengisile Jiyane）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）

新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）が2019から2020年にかけてパンデミックを引き起こした。世界保健機関（WHO）は2020年の2月、その感染症を「2019新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」と名づけた。略して「新型コロナ」とも言う。

◎文・顔婉婷（慈済基金会文史所職員）訳・荳荳

この一年のコロナ禍の変化

2019年冬

中国湖北省武漢市に「原因不明の肺炎」が報告され、2020年1月23日、中国政府は緊急に武漢市の感染地域に封鎖隔離措置を取った。それは近代の公共衛生史上初めて取られた、千万人規模の大都市のロックダウン措置である。

1月13日以降

コロナ禍はタイ、日本、韓国などに広がった。1月21日に台湾で初例が見つかり、同日にアメリカのシアトルでアジア人以外の初例が確認された。

2月

東北アジアで感染症が爆発的に広がり、数多くのクラスターが発生した。3月には、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、中東、アフリカなどでも瞬く間に広がり、アメリカ、イタリア、スペインの感染者数が中国を超えた。多くの国で鎖国や都市封鎖、行動規制などを行なったが、4月の世界の感染者数は3百万人を突破し、死者は20万人を超えた。

5月

ロシア、ブラジル、インドで爆破的に広がり、世界の累計感染者数は6百万人に達した。ヨーロッパは3月から4月にピークを迎えた後、落ち着きを取り戻したため、各国で封鎖が解除された。台湾でも連日、新規感染者がゼロで、国内感染者が出なくなったが、感染予防の新しい生活様式として、人と人の距離を保ち、マスクをつけ、手をよく洗って、良好な衛生習慣を維持するよう呼びかけた。

6月

世界の感染者数が1千万人を突破し、7月には情勢が制御不能な状態に陥った。理由の1つとしては、制限が解除された国での感染再拡大である。8月中旬、WHOはコロナ禍が新たな段階に入ったと発表した。若者の感染率が高まり、その多くは無症状で、免疫力の弱い人々に危険をもたらしていた。

9〜10月

新型コロナ感染症が出現してから10カ月、世界で亡くなった人の数は百万人を超えた。気温が下がると、人々は屋内にいることが多くなるため、ウイルスが広がりやすくなり、北半球は正に大流行の分岐点にいるとWHOが警告した。10月の統計では、アメリカ、インド、ブラジル、ロシア、スペイン、アルゼンチン、フランス及びコロンビアの感染者数がそれぞれ百万人を超えた。

11月

僅か30日で感染者数が千7百万人に劇的に増加したアメリカは、世界で初めて1千万人を超えた国になった。ヨーロッパでも再び感染が拡大し、各国がロックダウンを実施したため、再び人々の生活と経済にダメージを与えた。都市封鎖に耐えられなくなった一部の民衆が抗議活動に出たため、感染拡大は迅速に制御不能となった。台湾も新たに海外帰国の感染者が百人余り増え、全国民が「コロナ対策秋冬プロジェクト」に歩調を合わせた。

12月15日

世界の感染者が7千万人を突破。イギリスとアメリカでワクチンの接種が始まった。（慈済月刊六五〇期より）

慈済の世界におけるコロナ禍支援

感染予防物資の支援・87の国と地域
生活支援物資の配付・35の国と地域

●慈濟慈善事業基金会のグローバル感染予防物資支援（PPE1・0）プロジェクトは11月に一段落し、物資は最後の国であるチュニジアで無事通関を果たした。このプロジェクトでイギリスからギリシャの難民キャンプへ物資を調達したり、フランスからレバノンのカトリック教会へ届けたり、と台湾を含む世界87の国と地域を支援した。

●慈済は9月という早い時期から準備を整え、グローバル感染予防物資支援（PPE2・0）プロジェクトを始動すると同時に、医療用マスク、手袋など感染予防物資の備蓄を始めた。慈済大学などとの産学連携で進められた支援プロジェクトにより「新型コロナウイルス抗体スクリーニング迅速検査キット」を、感染拡大防止のためにインドネシアとホンデュラスに送った。

●世界的な感染拡大がいまだ深刻であることを考慮し、各国の慈済ボランティアは引き続き、食糧、物資、または緊急支援金を配付して、生活に影響が出ている社会的に不利な立場の人たちを支援している。

⬇ギリシャのレスボス島は、世界的に難民がヨーロッパに行くための中継地である。島で活動している「プロジェクトホープ」という慈善団体が慈済に支援を求めことを受け、イギリスの慈済人は11月、モリア難民キャンプに2万枚の医療用マスクを届けた。ギリシアは慈済のコロナ禍における86番目の支援国であり、慈済基金会の119番目の国際援助国である。（写真提供・プロジェクトホープ）

（慈済月刊六五〇期より）

新日常

訳・明彤

マスクの着用、こまめな手洗い、人同士の距離の確保は、人類の新型コロナウイルスに対する基本姿勢である。この一年間、個人の防護用品は、医療機関と市民の生活必需品になった。

⬆ジンバブエは行動制限をして感染拡大を予防した。首都ハラレで貧困者が最も多いエプワース地区では、クリニックから児童が栄養不良状態にあるという情報が入った。慈済ボランティアは、再び児童に給食提供ができるようになったため、子供たちが食事の前に手を洗えるよう、水と石鹸を用意した。

（撮影・Hlengisile Jiyane）

⬇ 慈済が寄贈した防疫物資は4月中旬に南アフリカに到着した。ヨハネスブルグのネットケア・ミルパーク病院は、慈済ボランティアが外出することで感染するリスクを負わないよう、わざわざ慈済南アフリカ支部へ救護車を差し向け、マスクと防護服を受け取った。（写真の提供・慈済南アフリカ支部）

⬅ クアラルンプールの慈済施療センターでは院内感染を防ぐため、待合室の4人がけのベンチを2人がけにし、1メートル以上の間隔を取った。（撮影・何志暐）

新生活困窮者

コロナ禍が世界規模で広がり、各地で異なる苦難が発生している。観光業に携わる人は、ここ暫く生計の見通しが立たず、新たな生活困窮者となっている。都市封鎖と外出禁止措置は中低所得者を飢餓状態寸前にまで陥れた。

⬆ マレーシアのマラッカ州は観光業が重要な経済の支えであった。以前、観光スポットのオランダ広場では派手な装飾のトライショー（三輪車）が行き交っていたが、コロナ禍で街道は閑散とし、客が来ない車夫は生活に困窮した。慈済ボランティアは積極的に慰問し、12月から支援を開始した。（撮影・羅秀蓮）

⬆ 東南アジアでは、ミャンマーの感染者数はフィリピンとインドネシアに次いで多い。ヤンゴン市タケタ地区の違法建築に住む不法労働者世帯は、まるで鳥が草で巣を作るようなホッタテ小屋を建てて暮らしているが、長期のロックダウンで深刻な食糧不足に陥った。慈済はミャンマー政府福利部と合同で初めて、11月に1万5百世帯に米を支援した。

（撮影・Yi Mon Than）

活気をなくした「楽園リゾート」

文・陳麗安　写真提供者・小野雅子　訳・御山凛

一万枚のマスクが「楽園リゾート」のサイパン島に届いたが、慈済ボランティアの小野雅子さんは嬉しい反面、不安もあった。前線で頑張っている人を守ることができるのは嬉しいが、サイパン島の慈済ボランティアは自分一人しかいないため、どうやってマスクを配付したらよいか…。

サイパン島は、西太平洋とフィリピン海の間に位置する。面積は百二十二平方キロメートルで、台北市の半分ほどの大きさだが、アメリカ領北マリアナ諸島の中では一番大きな島である。地形の特徴として、南から北にかけて十四個の火山とサンゴ礁から成っている島嶼は豊かな自然景観に恵まれている。その一番大きいサイパン島は「楽園リゾート」と呼ばれ、人口密集地と商業の中心地がある。

島の住民は純朴で、主に観光業が収入源だ。隣国のフィリピンからも飲食業やサービス業に従事する人が往来する。きらめく陽射しと柔らかな砂浜、そして様々なマリンスポーツが訪れた旅行客を帰りたくなくさせてしまう。二〇一九年五月、日本国籍の夫の転勤で初めてサイパン島を訪れた小野さんは、至る所にある椰子の木や青く透き通った海に囲まれて、毎日リゾート気分に浸って生活していた。

サイパン島

アメリカ領北マリアナ諸島の首都で、西太平洋に位置する。昨年三月からコロナ禍で島を封鎖したため、観光関連産業に従事する人々は収入が途絶え、連邦政府の救済に頼っている。ただ、外国人労働者はアメリカ国籍を有していないため、福祉を受けることが出来ない。

コロナ対策で島を封鎖、困難が目の前に

二〇二〇年二月の初め、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために、サイパン島は真っ先に、十四日間以内に中国に滞在歴のある人と中国を出発するフライトの入国を暫定的に禁止した。三月二十三日、政府は更に封鎖を厳しくし、フライトの制限を強化することで、ウイルスが島に上陸しないようにした。

五月になると、感染拡大は落ち着きを見せ始め、運行は再開されたが、政府はグアム島との往復だけに留めた。しかし、

観光業が主体で生計を維持していた島民には影響が出始めており、食糧不足の問題がいつでも起こり得る状態にあったため、人々は不安な日々を過ごしていた。

また、マスクが外出時の必需品となったとはいえ、収入が途絶え、更に失業した人からすれば、たとえ現地の平均時給が七ドルであっても、家賃と光熱費を支払ってしまえば僅かしか残らず、少なくとも一ドルはかかる医療用マスクは、久しく収入の無い苦しい生活をしている住民にとっては、贅沢品も同じである。

コロナ禍は小野さんの生活リズムをも崩したが、社会的弱者の境遇を目の当たりにした。ある日、老人ホームを訪ねた時、スタッフが着けていたマスクの質があまりにも悪かったことに気づいた。更に、現地の教会の牧師が新型コロナに感染したという知らせも聞いた。そんなことから小野さんは、「もっと質の良いマスクを医療従事者など前線で頑張っている人に提供できれば、どれほど良いことか！」と思い、慈済基金会に七百枚のマスクを申請した。結局、一万一千八百五十枚も届けてくれたのだ。

「サイパン島には自分一人しか慈済ボランティアがいない！」。これほど大量の物資を目の前にして、小野さんは嬉しい

反面、不安を感じた。例えば、短期間にどうやって大量のマスクを整理するか？配付式をオンラインで行うにはどうしたらいいかなど、あれこれ心配していた時、台湾人ボランティアの彭秀静（ポン・シウジン）さんから、彼女の息子の梁維元（リァン・ウェイユェン）さんが丁度、

●マトゥラーナ（Maturana）修道院には、８０歳以上の退職したシスターたちが多く暮らしている。小野雅子さんは、そんな彼女らの元にマスクを届けた。

サイパン島に留学しており、協力してもらえるという情報が入った。

「若い人が助けてくれてよかった！」小野さんは梁さんの協力の下、二人で直ちに老人ホーム、病院ボランティア団体、教会、特殊教育学校、修道院、女性専用シェルター、技術学院などに足を運び、医療用マスクを配付した。生活が困窮している家庭の子供たちや前線で頑張っている人たちが新型コロナから身を守る助けになればと願った。

●サイパン島の現地紙に、「CW友の会」のボランティアが慈済と一緒に食糧を困っている外国人労働者に配付したニュースが載った。

Adai!

Torres: CNMI needs more help to maintain system, save lives. PAGE 2

'IPI not to blame if China blacklists CNMI due to gambling' PAGE 5

75¢

Saipan Tribune

THE CNMI'S FIRST DAILY NEWSPAPER

Volume XXX, Issue No. 237

ntribune.com MONDAY NOVEMBER 30, 2020 www.facebook.com/saipantribune

arch continues for 2 fishermen

search for two missing fisher-
n and their vessel continues,
th the search entering Day 3
lay.

Department of Public Safety spokesperson Dre Pangelinan confirmed at press time yesterday that the fishermen and their vessel remain lost at sea.

Pangelinan said DPS Boating Safety, with assistance from the U.S. Coast Guard,

See SEARCH on Page 4

Propst hints at serving House Precinct 1 again

» Former lawmaker resumes criticisms against Torres

FERDIE DE LA TORRE

Despite a slew of critical comments against Gov. Ralph DLG Torres on his social me-

GENEROUS HEARTS

Tzu Chi Foundation volunteer Masako Ono shares mini "Words of Wisdom" scrolls to a recipient of the care packages that were distributed by the Friends of CWs last Saturday at the Central Park Roundhouse in Garapan. Ono, wife of the Japanese consul to Saipan, Kazuhiko Ono, was the main sponsor of last Saturday's distribution event.

Story on Page 3

塵も積もれば山となる 善の力を結集

六月、アメリカ連邦政府は島内の労働者全員に一人当たり一千二百ドルの救済金を出し、失業手当の申請も開始された。ただアメリカ国籍を有していない多くの外国人労働者には、「失業手当申請」の資格がなかった。中でも、子供がいない場合は更に状況が違った。現地で子供を生んでいる外国人労働者は、子供に「アメリカ国籍」が与えられるので、毎月一度「食糧券」の補助を受けることができるのである。

マスクの配付後、一部の外国人労働者の生活があまりにも厳しいことを目の当たりにした小野さんは、慈済基金会と現地の団体が協力して生活物資を届けることを計画していた。しかし、隣国のフィリピンが台風に襲われたことから、慈済は被災者の緊急支援を先に行うことになり、小野さんの計画は先延ばしになってしまった。

それでも小野さんは、證厳法師がいつもお諭しになる「困難がある人を待たせてはいけない」という言葉を思い出し、更に年の瀬が迫っていたこともあり、先ず、米、油、卵などの食糧を調達すると同時に、菜食を呼びかけ、いつも買い物をしている八百屋で新鮮な旬の野菜と果物を大量に買い付けた。その時、包装も「プラスチックを減らす」ことに気を配り、包装に古い新聞紙を使った。

被災者の名簿作成や配付活動に必要な人力の問題では、小野さんが以前に知り合ったアイリーン・ホールさんが立ち上げた「CW友の会（Friend of CWs）」（CW：合法的な臨時外国人労働者）という団体と協力することにした。会のスタッフの多くはフィリピン人で、主に島の失業した外国人労働者を支援している。

「スタッフはみんなが豊かな生活をしているわけではありませんが、失業者に比べ、仕事があるので生活が維持できています」。慈済の竹筒歳月のように、「CW友の会」のスタッフは日頃から少しずつ貯金し、「塵も積もれば山となる」精神でもって、生活物資を購入して貧困世帯を支援している、と小野さんが説明した。

「物資に限りがあるので、一番困窮している人を見つけて配付しています」。

小野さんによれば、今回の協力は、失業者の名簿作成から、家庭訪問、正式な配付まで厳しく審査しており、小野さんが自分で買い付けた物資だけでなく、「CW友の会」も米、缶詰、卵などの生活物資を提供したという。

今回、十一月末に行われた小規模の活動では、計百三十八人分の生活物資が配付された。その中にはフィリピン籍の外国人労働者だけでなく、少数だがトルコから出稼ぎに来ていた人も含まれてい

●長期的に外国人労働者を支援している「CW友の会」のボランティアたちは、互いにお金と力を出し合い、小野雅子さんと協力して配付をやり遂げた。

る。小野さんは、活動を通じて知り合った人との縁を大切にして、慈済の由来を話し、ちょっとした手作りの静思語のプレゼントを贈った。コロナ禍にあるからこそ、自分たちの励ましが彼らの力になればと思った。

台風の後、愛はまだそこにある

二〇一五年、台風十三号がサイパン島に上陸し、施設、建物、樹木が激しい暴風雨で被害に遭った。当時、支援を求められた慈済は、直ちに米と千個の鍋を届けた。これがサイパン島と慈済の出会いである。

五年後、コロナ禍で再び、慈済がサイパン島と手を取り合うことになり、支援が始まった。現在サイパン島に滞在する慈済ボランティアは小野さん一人だけだが、現地の慈善団体と協力して、困難にある人を助けている。一人で出来ることをやり続けている小野さんは、「困っている人たちの表情が柔らかくなり、その眼差しに感動と感謝の気持ちが現れてくるのを目の当たりにすると、私がやっていること全てに価値があると感じます」と心を震わせながら語った。

（慈済月刊六五〇期より）

陽性者が百万人に達し、年末の団らんを直撃した

文・廖哲民　訳・葉美娥

ヨーロッパは冬に入って感染拡大の第二波が訪れ、クリスマス前に各国は更に厳重な社会活動禁止令を公布した。このシーズンに集うことが難しくても、慈済ボランティアは寄り添いケアに気を抜くことなく、コロナ禍で人々の心が疎遠にならないよう努めた。

ヨーロッパ

秋から冬へと気温が下がる時期に、祝い事で人々が集ったことで、第2波の感染拡大が起きた。フランス、イギリス、スペイン、イタリア、ドイツ、ポーランドなどの国で、次々に陽性者の数が百万人を越えた。12月23日現在、世界で16カ国の感染者数が百万人を超え、そのうちの7カ国をヨーロッパが占めた。

毎年十月に行われるドイツ・ミュンヘンのビール祭りは世界的なお祭りである。二〇二〇年はコロナ禍により中止されたが、小さなバーはこのビジネスチャンスを逃さなかった。しかし、あるアメリカ人が隔離期間中にもかかわらずバーに出かけて飲み歩いたため、百人以上の二次感染を引き起こし、スーパー・スプレッダーとなった。

「ヨーロッパ全域にわたる感染拡大の第二波は、大部分がサービス業に関係しています。特にバーやカフェのような密な空間で、マスクを付けずに大声で話すことが原因です」とドイツに嫁いだ台湾人の林美鳳（リン・メイフォン）さんが言った。結婚後からフランクフルトに住んでいる彼女は慈済のベテランボランティアで、彼女の話では、政府は多くの大型イベントを中止したが、感染リスクは依然として存在しているそうだ。

航空機による移動と学校閉鎖をしなかったことが、感染リスクを高めた。九月以降、多くの国で陽性者の増加が停まらず、重症者も増え続き、病床が次第に逼迫し始めたため、各国政府はやむを得ず、封鎖措置や感染予防対策を強めた。感謝祭後の十二月十日、ドイツの新規陽性者数は過去最多となり、一日に二万人を超えた。メルケル首相は「祖父母の最後のクリスマスにしないで！」と民衆に呼びかけ、社交活動を減らすよう懇願した。

ヨーロッパ各国は互いに連動しているが、国によって感染予防対策がまちまちである。昨年春の感染拡大第一波の時、ドイツの規制措置はかなり厳しかったが、民衆は安全距離を保ちながらもまだ外出することができた。フランスでは一日に一時間だけ、運動や食べ物の購入にスーパーマーケットに出かけることを許可した。イタリアでは、外出の範囲が制限され、検査にいつでも対応できるよう身分証明書を携帯しなければならなかった。スペインでは、外出する前に警察に報告し、一時間以内に帰宅するよう制限された。

「二回目の感染予防規制はヨーロッパ人にとって衝撃と言えました」と林さんが言った。厳しい行動制限措置が次々と発令されていたが、感染拡大は収まらなかった。「もし行動制限措置が役に立つのなら、コロナ禍は終息するはずで、役に立たないのであれば、なぜ隔離に協力する必要があるのか？」。

コロナ禍は終息の見通しが立たず、生活リズムと人心を乱している。ヨーロッ

パの慈済ボランティアは前向きな態度で、オンラインで顔を合わせている。毎晩八時十五分から声を合わせて「祈り」を歌った後、順番に仏法を学んだ感想やコロナ禍の下での心境を分かち合ったりした他、医師を招いて感染予防知識を宣伝したり、ボランティアが布マスクの作り方を教えた。三月から年末までの三百日近くの間に、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、イタリア、オーストリア、ルクセンブルク、ヨルダン及びアメリカなどのボランティアが次々に参加し、延べ一万人余りが共に祈り、学び、「善の呼びかけ」の流れを作ったのである。

援助の手を差し伸べるのは難しいことではない

あるイギリスの医師が軽症の新型コロナウイルス感染者となった。自宅待機していた間、毎日ドアを開けると温かい食事が置いてあった。それは慈済ボランティアの温もりだと感じた。

あるスイスに住んでいた華僑の女性は妊娠中だったが、両親は八千キロ余り離れたアメリカにいて、コロナ禍で行き来が不便だったため、産後ケアに行けなかった。林さんはちょうどスイスに行く用事ができたので、加熱すればすぐ食べられる産後療養菜食パックを冷凍袋詰めにして彼女の家まで届けた。

ボランティアはコロナ禍で人同士の思いやりの心が途切れないよう、逆により親密にしている。林さんは、家という家にはマスクが用意されているが、足りない人もいるはずだと考えた。あるイタリアのボランティアは、友人がマスクを求めていることを知ったが、決められた以外の時間に勝手に外出すると約二百ユー

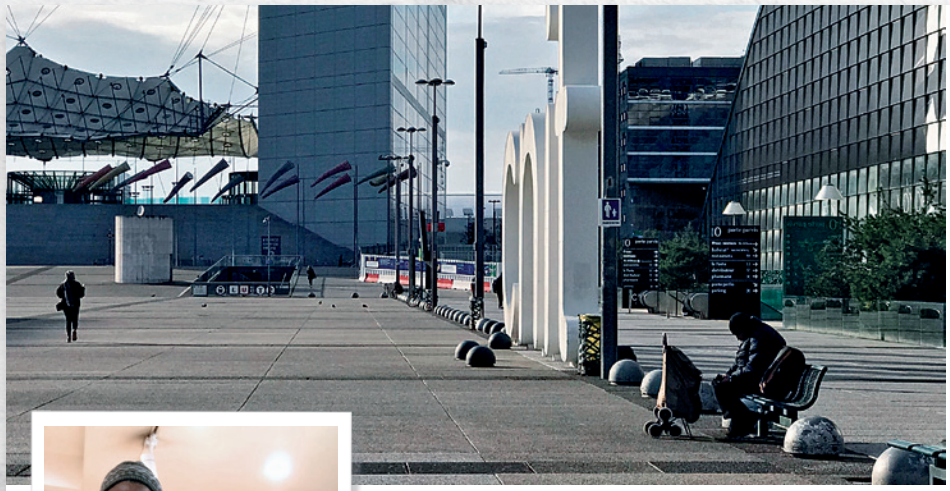
●ドイツ中西部の慈済ボランティアが行った中秋節慈善茶会では、中国語学校の先生と保護者を招いて一緒に防護フェースシールドを作成し、それを必要とする学校の先生たちに提供した。（相片提供・林美鳳）

ロ（約二万五千円）の罰金が課せられるので、夜が明けない前に、三十分掛けて歩いてその人の家へ行き、素早く玄関前にマスクを置いて、再び足早に自宅へ戻ったそうだ。

林さんは慈済の花蓮本部にとても感謝している。本部は昨年三月初めという早い時期に、ヨーロッパ地域の感染予防装備を心配してくれた。「当時のヨーロッパでは、新型コロナウイルスの感染はまだ、それほど深刻ではなく、人々はマスクなど必要なく、自分さえ健康であれば良いと考えていました」。しかし、ドイツ、イギリス、フランスなどで次々に感染が拡大し、特に医療スタッフの防護装備が不十分だというニュースが流れ、多くの団体が自主的に慈済に協力を求めてきた。四月下旬に、第一回目の八万枚のマスクがやっと到着し、ボランティアは直ちに配送した。

林さんの話では、慈済のコロナ禍でのケアは、最も簡単な「挨拶」から始めた。「もしこちらから周囲の人に関心を寄せなければ、誰がマスクを必要としているのか分かりません。また、電話を掛けて人々のニーズを聞かなければ、何も分からないのです」。このように、関心を寄せて声をかけてから行動に移すことで、人々がコロナ禍で疎遠になっていた心に警鐘を鳴らしたのである。

昨年五月、ドイツの防疫措置が順次緩和されると、ボランティアたちは直ちに集まってフェースシールドを作成し、学校へ配った。ドイツでは学校を閉鎖せず、生徒は登校していたが、先生たちは通ってくる様々な家庭の子供たちに向かい合うので、やはり感染を心配した。また、マ



●パリの封鎖期間中、慈済ボランティアの馮倩明（フォン・チェンミン）さんは、人影が少ないシャルルドゴール広場近くのスーパーマーケットへ買い物に行き、食糧が欠乏していた路上生活者にパンを与え、スーパーの職員にマスクを届けた。（相片提供・馮倩明）

スクを付けたまま授業を行うことは先生にとって不便だったので、慈済は先生と学生にフェースシールドを作った。その優しさは聴覚障害学生にも恩恵をもたらし、先生の口の動きがはっきりと見えた、と林さんが説明した。

家で菜食するのが最も安心

多くの家庭ではコロナ禍によって家で食事することが多くなった。ヨーロッパの慈済人は、この機会に菜食を大いに呼びかけた。ボランティアチームはフェースブックに「ヨーロッパ菜食の魅力E-Veggie」というファンページを立ち上げ、そこで人々は自分の得意な菜食レシピを分かち合っている。環境保護の理念から、ドイツの菜食主義者は少なくない。しかも最近、食肉加工工場の従業員が複数感染していたことから、今、菜食は多くのドイツ人が好む飲食のトレンドになっている、と林さんが説明を補った。

ファンページにオリジナルの菜食レシピーを公開した、ドイツの慈済ボランティア・林森喜（リン・スンシー）さんは、曽ては肉食中心の中華料理店を経営していたが、コロナ禍のこの一年の間に店を閉め、家族全員で斬新な菜食料理を考え出し、毎日一品を投稿している。林美鳳さんは称賛の声を惜しまなかった。「投稿した二百品の料理は一つも重複したものがありません！」。林森喜さんの料理に使う食材はヨーロッパの何処でも手に入れることができるため、簡単にレシピ通りに調理できるのである。

二〇二〇年九月末、林さんは二重マスクと長めの防護フェースシールドを付けて故郷の台湾に帰った。コロナ禍で変わったヨーロッパの日常生活に慣れていた彼女は台湾で何度も慈済の年末祝福会に参加したが、とても不思議に感じたそうだ。大勢の人が集まって祈りの会が催されていたが、とても安心して参加できたのは、皆が心して感染防止に努めた成果なのだと、改めて理解した。

二〇二〇年に義父が亡くなったのは、丁度ドイツで感染防止措置が取られた時だった。屋外での告別式は参加者が非常に少なかっただけでなく、その後の親族の集まりでも一・五メートル間隔で坐り、参加者は僅か六人だけだったことを、林さんは思い出した。十二月末にドイツに戻る時、丁度、欧米人が最も重んじるクリスマスの時期だった。彼女が願ったことは、コロナ禍が終息すること以外に無かった。（慈済月刊六五〇期より）

【コロナ禍で何が変ったか】

困難時の悲喜こもごも

文・謝勤（香港慈済ボランティア）　訳・心嬰

この一年、コロナ禍でわが子を含む多くの香港人は感染リスクだけでなく、失業や休業に直面した。今は困難な時期にあるが、諸々の心温まる光景を見ることもできた。

私が香港に移住してから二十五年経った。毎年、故郷に帰るのは旧正月で、数日間、両親と過ごすだけである。親は年々老いるため、二〇一九年の暮れにはこれまでで一番長い二十日間の休暇を取った。三人の子どもは仕事で一緒に帰ることができなかった。私は一人で福建省にある自宅に帰り、旧正月を両親と楽しく過ごしたいと思った。ところが、旧正月の前に、新型コロナウイルス感染症が発生した。

そのころ、香港にはまだ感染者はいなかったが、既にさまざまな情報が流れていた。今まで私が子供たちのことを心配してきたが、今回のコロナ禍をきっかけに、今度は子どもたちが私のことを案じてくれるようになった。娘は、私があまりニュースを見ないことを知っていたので、ひっきりなしに私にメッセージを送って注意を促して来た。私が、田舎は安全だし、防疫と管理もしっかりしているので、大丈夫だと言っても、娘は相変わらずそれを疑問視し、絶えず、私に気を付けるようメッセージを送ってきた。恐らくそれがコロナ禍による私たちの初めての変化だと思う。

香港で新型コロナウイルスの感染が拡大するにつれ、人口密度の高いところはより危険なため、娘は私に香港に戻らないよう勧めた。私が勤務していた会社の深圳にある工場は操業停止になり、会社も正常に運営できなかったので、私は安心して自分で長い休暇を取った。もちろん一番喜んだのは両親で、毎日一緒に料理を作ったり、おしゃべりしたりして過ごした。両親の傍にいてあげたいというの

●コロナ禍の下でも慈善の歩みは止まらない。慈済ボランティアはクントン旧市街にある雲漢団地を訪ね、低所得世帯の日常生活やマスクの需要を理解した後、直ぐに支援した。（撮影・李健平）

は私の長年の願いではあったが、このような形で実現したことは悲しかった。

感染者と死者の数が増加の一途をたどり、医療人員が相次いで感染地域の支援に行き、各地の慈済人が防疫物資を調達するために奔走する姿を見ても、私は彼らのために祈る他に何もできないことを恥ずかしく思った。

五月になると、これ以上会社の業務を遅らせることができなかったので、名残惜しい気持ちで両親と姉妹に別れを告げ、香港に戻った。そして、自宅で十四日間の待機を経てから職場に復帰したが、同時に、慈済香港支部の活動に参加するようになった。

積極的に善行する

コロナ禍で、皆感染リスクを背負っており、以前は活気に溢れていた香港がすっかり静まりかえってしまった。観光業は完全に停滞し、小売業も大きな打撃を受け、どの業界も影響から逃れることができなかった。息子は失業し、次女は操業短縮のために無給休暇を取らされ、また長女のピアノ教室は休みになり、個人レッスンの学生だけがレッスンを続けた。多くの香港人が同様の状況に置かれているはずだ。

コロナ禍は既に私たちの日常生活に大きな変化をもたらした。しかし、このような大変な時期だからこそ、多くの心温まる出来事を目にすることができた。

長女は、借りているスタジオの家主が自主的に家賃を引き下げてくれたと同時に、政府の助成金も申請できるため、困難な時期を乗り越えることができる、と

私に言った。一方、私が働いていた会社は政府に「雇用保証」の補助金を申請し、工場の家主も自主的に家賃を引き下げてくれた。売上高は大幅に落ち込んだが、皆で努力して、難関を乗り越えようとしている。

シャングリラホテルグループはコロナ禍でも、防疫物資や食料品を購入するためのお金を寄付し、従業員が慈済ボランティアと一緒に真心を込めて「祝福袋」を作った。そして、昨年五月から八カ月連続して、さまざまな支援機構を通じて低所得者世帯や一人暮らしの高齢者に月二回、毎回およそ千世帯に、愛を込めた祝福袋を届けた。更に、配付の期限を延ばしながら従業員に寄付を促し、家族や友人を誘って一緒に善行を行うよう呼びかけた。

私は幸運なことに何度も活動に参加して、コロナ禍で影響を受けた人々や、他のＮＰＯ団体及びその責任者、慈済ボランティア、シャングリラグループのボランティアたちと知り合うことができた。その時、苦難と同時に愛と慈悲を目にした。

シャングリラグループの従業員は皆、積極的で、ある配付活動の時、若くてチャーミングな洪潔児（ホン・ジエアル）さんが興奮気味にこう語った。「初めて活動に参加した時、お年寄りたちが祝福袋をもらった時の幸せそうな表情を見てとても感動しました。ところが、二回目の活動では申込みに失敗して参加できず、三回目は会社のボランティア募集の

コロナ禍で予期しなかったこと

・私はこれまで長い間、子供たちのことを心配してきたが、この感染症で、彼らが私のことを案じ、安全に注意するよう、言ってくれるようになった。

・今回、色々な団体と協力して配付活動をしたことで、助けを必要としている人々に接することができたと同時に、愛の道を歩むのは私たちだけではないことを知った。

メールを見るや否や素早く申し込んだので、やっと参加のチャンスをつかみました」。また、「普段は航空券の取り合いをしていましたが、ボランティアをするためにも奪い合いがあるのですね」と言った。

香港のコロナ禍は何度も厳しい局面を迎えたが、彼らの人助けの思いは変わらなかった。ボランティアの邱嘉宏（チウ・ジャホン）さんは、「感染症は極めて深刻ですが、タブー視しすぎないことが重要です。感染防止対策をしっかりすれば、自分が安心でき、他人を助ければ、嬉しくなります。より多くの人のために頑張りたいと思います」と話した。

雲漢団地で祝福袋の配付を行った時、シャングリラグループの黄琴心（ホワン・チンシン）さんは、「配付に何回参加したかは覚えていませんが、最も印象深かったのは、娘と一緒に参加した時、あるボランティアから『善行と親孝行は待ったなし』という静思語を教えてもらいました。私はとても感銘し、娘と二人でその言葉を胸に刻みました」。

複数の慈善団体と協力して祝福袋を配付しましたが、他に比べて香港家庭福祉協会から支援を受けていた人たちは、私が出会った中で最も若い人たちでした。責任者の王志平（ワン・ツーピン）さんは、「コロナ禍の影響で、数多くの家庭では失業や操業短縮のために収入が大幅に減少し、家庭の不和をもたらした人もあったため、特にそのような家庭に配慮して配付対象に選んだのです」。

王さんはボランティアのインタビューを受けた時、「私たちは感謝することと受ける側よりも施す側の方が幸せであることを知っています。香港が平和な社会であることを願っています」と語った。

私は彼の言葉に深く感動した。それは、真に苦しみを理解し、苦難にある人々を支援する第一線に立つソーシャルワーカーの心から出た言葉であることを知ったからだ。

様々な支援団体の共同寄付を通して、助けを必要としている人々に接した時、大愛の道を歩むのは私たちだけではないことも知った。コロナ禍が私たちに苦難をもたらしたが、教育にもなった。困難と共に愛を学んだ。

（慈済月刊六五〇期より）

国際慈善・レバノン

ベイルート爆発事故の後

文・廖哲民　撮影・モハマッド・アルジャマル（トルコ慈済ボランティア）
訳・胡光中（トルコ慈済ボランティア）＆惟明

レバノンのフォートワ・イスラミック協会の協力を得て、慈済ボランティアはベイルート爆発事故の後、地中海に面した貧困被災地で、今まで援助の届かなかった家庭を支援した。トルコの慈済ボランティアは、家庭訪問して物資の配付を行った。貧困者が慈済の食料品パックを開けた時、内心から感動が沸き立ち、愛が確かに存在しているのを感じた様子が想像できる。

●ベイルート港（左）は、ユーラシアとアフリカ諸国との貨物の重要な中継地である。8月上旬に爆発事故が起きたが、下旬には機能が回復した。12月にボランティアが支援物資の配付に訪れた時、市街地の建物はまだ、至る所で損壊したままだった。

二〇二〇年八月四日、かつて「中東のリトル・パリ」と呼ばれたレバノンの首都であるベイルートで、国際社会を震撼させるベイルート港爆発事故が起きた。天に届くきのこ雲と強烈な衝撃波により、多くの死傷者が出た。その光景は、町全体がまるで世界の終りを迎えたかのようだった。そして、長年の戦乱の為、シリアから難民が流れ込み、深刻な経済危機に陥っているレバノンに重い打撃を与えた。

爆発事故の後、慈済は支援に協力してくれる団体を探した。トルコの慈済ボランティアを通して、現地の慈善団体であるフォートワ・イスラミック協会と連絡がとれたので、支援物資の購入と配付人員の募集を依頼した。十二月にトルコの慈済ボランティアも一緒にベイルート市ジュナー地区に入り、最も援助を必要としていた貧困地区の家庭に食糧と物資を届けた。

ここは戦地よりも悲惨

「（家庭訪問用紙を指して）その紙をもらえますか？」と三歳の女の子ノールが顔をのぞかせて、フォートワ・イスラミック協会のボランティアにきいた。「これは大人に書いてもらうものだよ」とボランティアが答えた。「私はお腹がペコペコなの……私の写真を撮ってください、それから食べ物をもらえますか？」と彼女は言った。十月の家庭訪問での暫しの出会いだったが、その僅かな会話がボランティアの心に深く焼き付いた。ノールの写真をトルコのボランティアに送ると、第二期のアラビア語版の月刊「慈済」の表紙人物になった。

十二月、トルコの慈済ボランティア三人が、レバノンでの配付活動に参加した。「私は自分の国が戦乱で破壊されたのを見てきましたが、こんなに広い範囲で破壊されたのは見たことがありません」。トルコ・マンナハイ国際学校の副校長であるアフメド・アリアン氏は、二〇一三年、シリアのダマスカスから逃れ、七時間の陸路を経てレバノンに着き、そこからトルコに渡った。高学歴を持つインテリでありながら、やむをえず工場の出稼ぎ労働者になったが、二〇一五年に慈済の支援を受けてからボランティアとなった。

ベイルート市での被害状況の調査や家庭訪問は、戦乱を十分経験してきたアリアン氏でさえもショックを受けた。大爆発の後の市街地を人と車が行き来する中、至る所に被害が及び、多くの建物が

損壊し、ガラスが割れた窓はカーテンで覆われているのを目にした。「被災地の半径二・五キロ範囲は全てこんな状態で、とても悲しくなります」。

海辺にあるサン・サイモンという貧困地区は、町の南部に位置するジュナー地区にあり、パキスタンやシリア難民と現地の貧困者が住んでいる。このような地域は普通、外部の人間は出入りできず、中の人と接触することが難しかった。そこで、名声のある地元の区長や村長の協力を得て、やっと訪問することができた。至る所に貧困と病が見られ、道には水溜りができ、ゴミだらけだった。雑然とした建物の中、トイレとキッチンとベッドがひしめき合った部屋は、狭くてジメジメしていた。「まるで動物のねぐらのようで、人間が住める場所ではありませんでした」とアリアン氏が悲しそうに言った。

一室に六十歳過ぎの老婦人が住んでいたが、呼吸器系統の病のために呼吸器を付ける必要があった。清掃婦である彼女は、既に二カ月も電気代を払っていないため電気を止められ、生命に危険が及んでいた。人が訪ねてくると彼女は驚きと恐怖のあまり、「私の命はアッラーに預けています。あなたたちは何をするつもりですか」と叫んだ。彼女は、助けに来る人のいることが信じられなかったのだ。

ある一人の、糖尿病を患い、腹水で肺が圧迫されて仕事ができず、医療費も負担できない五十歳の男性がいた。彼の長兄は既に他界しており、頼れるのは義姉だけで、食べ物さえないこともよくあった。また、甲状腺の病気も手術を必要としており、医療費は約百万レバノン・ポンド（約六万円）だった。「しかし、私に

●フォートワ・イスラミック協会のボランティアは、受領者が食料品を1つずつ麻袋に入れるのを手伝った。食糧は重さが29キロにもなったが、1つの家庭が1カ月間過ごすのに必要な量である。麻袋は次回の受領の際に再利用できる。

は千レバノン・ポンド（約六十円）もありません」。

枕元に座る幼い女の子をかかえた若い父親は、脚に怪我をしていたが、家族を養う為に、痛みを堪えて仕事を続けた。しかし、縫った傷が治っていなかったため、炎症が続き、痛んでいたのだ。

「私たちを案内してくれた現地の人によると、私たちが目にしたのは百分の一のケースにしか過ぎないそうです。ジュナー地区にいる人々の顔には、悲しみと苦しみが見て取れました」。トルコの慈済ボランティアであるサイド・アルホムシさんは、シリアに残してきた家族とも

したサイドさんは、事前に慈済の慈善運営とボランティア精神を、協会のボランティアに説明した。「尊重と尊敬の心でもって、受け取る側の人々と接するのです。上からの目線で行うのではなく、笑顔を浮かべて家族に接してください」。

「このボランティアたちは昼間の仕事で疲れているのに、休み時間を犠牲にして、心から尽力して住民の為に貢献していました。彼らはもっと多くの奉仕ができるよう、熱意を持っていたのです」とサイドさんはトルコのボランティアが如何にしてゼロから慈済精神を学び、実践したかを話した。

現地は防疫物資が不足していたため、配付活動の経験が豊富なトルコのボランティアが彼らに、動線の計画や人同士の開ける間隔などを、住民の着席後の状況を模擬しながら、示して教えた。

六年前にトルコのスルタンガージ市で、シリア難民が初めて地下室で慈済の配付を受けた時に似たような状況が、レバノンに再現された。国境を越えた配付では、米、フジ豆、ヒヨコ豆、粉ミルクがテーブルいっぱいに置かれてあった。一世帯につき二十九キロの食糧を受け取ることができ、コロナ対策として、全ての人にマスク、冬に必要な毛布とガスス

う五年も会っていない。彼は目にした出来事で気持ちが沈んだ。「トルコに戻ったら、我々が知っている全てのシリアの人たちに伝えます。彼らの生活は苦しくても、ここより困ってはいないことを。そして、彼らの愛を込めた寄付金は、これらを必要としている家庭に届いていることも報告します」。

残礫の中から立ち上がろう

十二月の二日間、五回にわたって、四百世帯余りに支援物資の配付を行った。トルコ慈済基金会で配付計画を担当

トーブも支給された。

サイドさんによると、最初の配付現場では人々は微笑みを浮かべて「ギフト」を受け取っていた。彼はある老人に、喜んでもらえますかと尋ねた。老人は「アッラーからあなたたちに、幸福がもたらされますように！」と真心を込めて言った。

毎回の配付現場では、ボランティアは住民に二〇二〇年の台風１９号と２２号が立て続けにフィリピンを襲った時も、慈済が懸命に支援したことを説明した。現場に来ていた幼いノールも、父親が懸命に稼いできた半日分の所得を全部フィリピンの被災者を支援する為に竹筒貯金箱に入れた。その時、人々は、「アッラー

慈済のレバノンケアの紹介

- 人口は６８０万人超、西アジアに位置し、シリアとイスラエルに隣接。
- １９４６年に独立した後の長年にわたる戦争で、貧富の差が著しく大きくなり、若者の失業率が高止まりしている。２０２０年８月４日下午６時に、ベイルート港で大爆発事故が起き、数十万人が帰る家を無くした。市内にある２番目に大きい穀物倉庫が破壊されたことで、コロナ禍で起きた食糧不足に拍車をかけた。
- 慈済は、レバノン・フォートワ・イスラミック協会の協力を得て、災害支援を展開することができた。同協会は１９７４年に設立され、長年貧困家庭や貧しい大学生を支援してきた。
- トルコの慈済ボランティアは、イスタンブールからベイルートへ支援に駆けつけた。爆発事故の波及を受けたジュナー地区にある貧困区「サン・サイモン」で被災した住民に対し、１２月１２日と１３日に５回に分けて４百世帯余りに支援物資を配付した。レバノンは慈済が慈善支援した１１７カ国目の国である。

はあなたたちを酬います」と彼女と父親に言った。その場でポケットから小銭を出す人もいれば、近くにいる人に「後で返しますから、寄付の為のお金を貸してもらえますか」と言う人もいた。

トルコボランティアのモハマッド・ニムル・アルジャマルさんは、人々の無私の奉仕を見て、「トルコのシリア難民のように、ベイルートのボランティアが支援を受けた後、苦難の人たちを助けるようになるのを、私も願っています」と言った。

現地で貧困家庭の支援をして半世紀近くになる、フォートワ・イスラミック協会の責任者であるジヤド博士（Ziyad Al-Saheb）は、二つの国のボランティアが協力し合い、レバノンに心を尽している様子を見て、「幸福な雰囲気に満ちた配付会場に、明るい未来が見えました。慈済に見られる人道、仁愛、助け合い、見返りを求めない精神は、正しくイスラム教が教えてくれた精神であり、人と人の間には愛が必要なのです」と讃えた。

長年の戦乱を経て来たレバノンはインフラ整備が不足し、貧富の差も大きい。今回のベイルート港爆発事故後は、アラブ世界の著名な詩人ニザール・カッバーニーが書いた詩「世界の女王、ベイルートよ」に出てくる戦後のシーンさながらである。「我々は貴女の美しさに嫉妬し、傷つけました。ああ、ベイルートよ、我々は貴女を公平に扱わず、憐れみもかけず、貴女を傷つけ、泣かせたことを認めます……ベイルートよ、悲愴から甦れ！」。この詩文は傷を負ったベイルートの地を踏んだ慈済ボランティアにとって感慨深いものだった。この傷だらけの町が一日も早く残礫の中から甦ることを願っている。（資料の提供・顔婉婷）

（慈済月刊六五〇期より）

●12月の配付活動を前に、トルコのボランティアがアラビア語版の月刊「慈済」をもってサン・サイモンを訪れ、3歳のノール（左から2人目）は表紙に載った自分の写真と撮影した。

清らかな「心源」

◎文・釋徳仉／訳・済運

見返りのない奉仕をして感謝し、
あたかも宇宙の万物が結集するように合掌して、
心源（万法の源）に回帰するのです。

後悔しない道

中部地区の慈済人は十二月四日から六日まで、精舎で精進しました。一同、食堂や厨房、精舎の壁の清掃、下水溝の掃除などを手伝いました。十二月七日、彼らが上人に会見した時、甘清文（ガン・チンウェン）師兄（スーシォン）が志学大愛農場で、長年、水が流れなかった水道の掃除を手伝った時のことを話しました。何年も大愛農場で農耕してきた賴松勇（ライ・ソンヨン）師兄は中部地区の法縁者の手伝いに感謝すると共に、今年は天候不順のため、農作物の収穫が少ない、と報告して涙を流しました。

成すべきことをすれば、後は天に運命を任せるしかありません、と上人はもっと楽観的になるよう教えました。農作物の収穫は減っても、それによって農耕した人はより多くの「悟り」を得たのです。農耕した期間に投入した労力と愛情は無上のものです。そして、これらの農場があるからこそ、各地から来た慈済の法縁者が農業に投入することができ、皆が自分の体得したことを分かち合うことができるのです。また、その内容を整理したものも非常に貴重な慈済の歴史の一部となり、無上の宝となるのです。

今回の行脚で、各地の慈済人がとても誠意のある「慈悲」を持っているのを目の当たりにしました。弟子たちは皆、とても思いやり

があり、私に心配をかけまいとして「家」を護っています。一つひとつの慈済道場は菩薩道場であり、あらゆる歳末祝福会には「霊山法会」が行われ、一人ひとりが心して経蔵の中に有りました。

上人は、慈済人が一つの目標に向かって菩薩道を精進し、共通の心の行き先を持っていることを褒め称えました。人によっては、仏教を信仰し、三宝に帰依し、敬虔に礼拝や僧を供養していても、心の中ではいつも、家庭が平安で子供が良い子に育ち、和やかになりますように、などと何かを求めるものです。

「人生では何かを求めて、それが得られないと煩悩が起きますが、この世は思い通りにならないことの方が圧倒的に多いのです。十の願いの中で九つは当てが外れる可能性の方が大きく、そこで尽きない煩悩が起きるのです。奉仕に見返りを求めなければ、失う物も有りません。心はは常に自在で嬉しく、歓喜に至るのです」。上人はこう言いました、「皆が常住尼僧たちの手伝いで、汗だくになり、全身を汚して、志学大愛農場の溝を掃除するのは、別に目的があるわけではありません。ただ、そこは皆の家であるゆえに、心からその「家を大切にし」、清潔に保ち、荘厳にしたいだけなのです。その任務を達成した後に沸き起こる喜びが、心から奉仕した後の法悦なのです」。

「私自身、とても幸せな人間だといつも思っています。その幸せは良い弟子たちによってもたらされ、皆は私の心に寄り添い、私の歩調に付いて来ます。従って人生に悔いはなく、この道を歩んできたことを悔いることはありません」。上人は、「この五十数年間に、慈済が台湾で、世界で、これほど多くの善行をして、こんなに多くの人を苦難から助けたと思うと、当初、その一念を起こして慈済を創設したことがとても嬉しく感じられます。これほど多くの慈済人が心を一つに力を合わせ、誰もが見返りを求めない奉仕をして、心か

●北部の委員認証式・歳末祝福会でボランティアたちが経典の手話劇を演じた。「慈済道場は全て菩薩道場であり、全ての歳末祝福会には『霊山法会』が存在し、一人ひとりが心して経蔵に没入していました」と32日間の行脚を終えた上人は心から感謝した。（撮影・羅景譽）

ら感謝してきたのです。慈済人の慈善の足跡は何十カ国にも及び、慈善ケアは百以上の国と地域で行われてきました。また、近年は慈済が国連の会議に出席し、世界は仏教団体が広く奉仕していることを目の当たりにしています」と言いました。

「慈済人はこんなにも多くの国に出かけていますが、それは観光ではなく、苦難から人々を救うためなのです。そして、そこを離れる前に見られる最も美しい光景は、両手を合掌してお辞儀するという感謝の姿です。奉仕する側が受ける側にお辞儀するのは、一般的には不思議に思うはずです。しかし、慈済人はそれができ、自腹を切って奉仕する機会を勝ち取り、その上、心から感謝しています。胸の前で合掌するという動作は、あたかも宇宙の万物を合わせているようで、慈済人は清らかな智慧でもって菩薩道を歩み、宇宙の万物を結集して、心源に回帰させていることを表しているのです」。

また、上人はこう言いました、「万法の源は心にあり、心の無明や煩悩もまた、皆で大掃除するように、心して掃除することが源を清らかにする方法であり、法がその清らかな心源から発揮されるよう、群衆に分け入って、菩薩道を歩むのです。皆が精神の方向から逸れず、心から精進することを願っています」。（慈済月刊六五一期より）

❑地球にやさしい思考

物の寿命を大切にする

物の寿命には長短がある、
人に使われている間、
物の寿命は続いている。
大事に使えば物の寿命は伸びる。

（『地球と共に生きていく』より）

リサイクルボランティアは回収してきたプラスチック製品を分別してリサイクル業者に出す。
（撮影・顔霖沼　台北市心光リサイクルセンター）

三月の出来事

訳・済運

03・05	慈済大学医学部２０２０年度の解剖学科実習課程が終了し、当日、葬式と火葬、追悼式及び入龕式が行われ、１２名の無言の良師の遺族に感謝の意を表した。
03・07	慈済基金会は毎年３月、６月、９月の第１週の週末を精進日として、委員になる為の養成講座と委員及び慈誠の為の大規模な勉強会を、台湾全土の拠点で開いている。今年第１回目の精進日であるこの日の勉強会はオンライン方式で行われ、「静思法髄妙蓮華方便品（ほうべんほん）」の解釈、慈済５５周年経蔵手話劇の説明会、永続運営に関する報告及び社会的影響力に対する評価報告などという内容だった。

03・09	◎慈済基金会は「普茶（あまねく大衆に茶を供す）活動」チームと協力の覚書を交わし、3月より台湾全土43の慈済拠点で普茶コーナーを設けた。それを機に、大衆になるべくペットボトル入り飲料水を買わず、環境保全を行動に移すよう呼びかけた。このチームはサーキュプラス・スタートアップ・エコシステムグループに属し、情報技術でもって循環経済を後押しし、公益人文に関心を寄せている。 ◎花蓮慈済病院骨髄移植ケアチームはこの日、インドネシア慈済病院の骨髄移植主任医師とオンライン会議を開き、骨髄と造血幹細胞移植に関する医療知識を共有した。この研修会は2020年9月22日から毎月1回行われている。
03・10	慈済基金会は台湾水道局と協力の覚書を交わした。双方は国際災害支援での緊急給水と水質浄化技術の慈善支援について、水処理技術

	における教育訓練、技術コンサルティング、水資源と環境に関する宣伝、人文精神の格上げなどで協力する。
03・15	◎慈済基金会の介護促進センターは、新北市蘆洲区と永和・中和両区の静思堂及び三重志業パークにデイケアセンターを立ち上げた。この日に蘆洲静思堂で合同除幕式が行われた。 ◎花蓮玉里慈済病院は開業22周年、台東関山慈済病院は21周年を迎えたことから、この日に記念行事が行われ、医療スタッフと慈済ボランティアの奉仕に感謝した。
03・17	宜蘭県蘇澳鎮の台九線蘇花公路東澳セクションで重大交通事故が発生した。観光バスが山側斜面に衝突して、6人が死亡し、39人が重軽傷を負った。慈済ボランティアは慰問活動を開始し、数チームが事故現場に向かった。ミネラルウォーターを救助人員に提供する

	と共に、葬儀場での助念（遺族と共に念仏する奉仕）や病院に負傷者を見舞い、緊急慰問金を届けた。
03・18	◎慈済医療財団法人バイオイノベーションセンターと花蓮慈済病院、及び中興大学の技術移転機関である通用幹細胞公司は、神経萎縮治療及び幹細胞製造開発における産学連携の契約を交わした。 ◎慈済大学模擬医学センターは18日から21日まで、模擬手術講座を開いた。当日、8名の無言の良師の起用式が行われ、29名の慈済病院の医師と20名の医学生及び22名の花蓮県消防局シニア救急技術員たちが参加して学習した。22日に葬式と追悼式及び入龕式が行われた。

03・19	国連女性の地位委員会は第65回会議を招集し、NGO女性の地位委員会も同時にオンラインによるバーチャル・フォーラムを行なった。慈済基金会は招待を受けて参加し、当日、並行してオンライン会議を主催し、女性から見る水資源及び衛生を護るという議題で討論した。
03・20	慈済骨髄幹細胞センターは桃園静思堂で「ケアチーム国際認証教育訓練」講座を開き、80人のメンバーが参加した。
03・23	慈済基金会の第5期防災士養成プロジェクトにより、23日と24日に花蓮静思堂でセミナーが開かれ、慈済志業体職員と花蓮慈済ボランティアが参加した。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ニューヨーク支部
（New York）
TEL:1-718-8880866

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０２１年４月２０日発行・２９２号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@daaitv.com

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

第一線を護るフェースシールド　正月から増産

１月、台湾の衛生福利部桃園病院で新型コロナウイルスの院内感染が発生した。慈済は１万枚余りの防護フェースシールドを贈呈して、桃園市政府を支援した。旧正月５日は休日だったが、高雄のボランティアたちは高雄静思堂でフェースシールドの製作に勤しみ、奉仕できるこのチャンスに喜びを感じた。（撮影・黄筱哲 2021.02.16 台湾高雄）

慈済日本サイト　慈済ものがたり